

## やり残したことと雑感

服部 仁

同朋大学で過ごした四十五年間の逸話などについては、五年前に沼波政保先生が書いておられるので、それに漏れたことを私が書くと、悪口雑言ばかりになるので止めにする。また、同朋大学でやり残したこと、あるいは阻止にあつてできなかったことも多々あるが、それについて書いてみるでも愚痴になるだけである。そこで、ここでは、今後、私が調べたいこと、研究しなければならぬことを書き記しておく。私が亡くなるまでにできなかったならば、「大口ばかりたたいて」と嗤ってやって下さい。加えて、最近の私感を付記する。

一は、『俳諧歳時記』を読む」という本を出すこと。

現在では、『歳時記』と言えば俳句の季語の説明書と認識されているが、江戸時代においては、それは「季寄せ」と呼ばれた。「歳時記」とは、文字どおり歳時の記であり、年中行事を記した書物のことであつた。俳句という言葉

い方が一般化したのは、明治になって正岡子規が俳句の革新運動を始めて以降のことであって、江戸時代は句、発句、俳諧と呼ばれていた。その俳諧と歳時記を結合させたのが曲亭馬琴であった。享和三年（一八〇三）に出版された『俳諧歳時記』がそれである。その『俳諧歳時記』に載せられた季の詞を、その折々に相応しい詞を選んで、『中日新聞』の「句歌つれづれ」という欄に、平成六年四月から同十五年四月まで、二月に一度ずつ連載紹介した。他にも、『俳諧歳時記』に関する文章を書いているので、それらを取り混ぜて一書と成す予定である。出版社からも、毎年催促されている。

二は、東京大学史料編纂所所蔵の『加藤枝直日記』の翻刻・解説と、枝直の弟子大垣藩詰組頭三五〇石を扶持された筒見貞温（寛政六年（一七九四）没）の、明和八年（一七七二）二十二歳の時から寛政三年までの生涯を長歌に詠んだ『美努曲』（写本。外題は『美努の曲』とあれど、これは後年御子孫が明治になって記した題。正式な読みはミノブリではなかるうか）の翻刻・解題を付載した本を出版すること。

『美努曲』という本は、今は無き旧名古屋丸善での古書展で、某古書肆に、「これは、誰々（和歌専門の方）向きの本だネ」と言ったところ、「そう思うんだったら、先生、買ってって」と言われて入手した本。内題下に「藤原貞温<sup>千代</sup>とあるだけだったので、筆者を右に記した大垣藩士筒見貞温であることを突き止めるのは苦労した。その経緯は、出版の折にお読み下さい。

これも版元には出版を約している。

三は、『於千代物語』等（写本、板本）の翻刻、及び考察を、『同朋大学仏教文化研究所紀要』に掲載すること。

薩摩国で真宗が禁教であったことは、よく知られた歴史的事実であるが、門徒お千代が処刑されたことは、事実か  
どうか不明である。ただし、お千代が処刑された話は、全国に広まっていたようである。

これは令和二年度にするはずであったが、原本が行方不明になったので延期としたもの。

四は、現在、『浮世絵芸術』に連載中であるが、八代目市川團十郎の生涯を、浮世絵を中心としてヴィジュアル  
にまとめてみたい。八代目市川團十郎は若くして大坂で自害する。その理由は不明である。ただ自害に至ったゴシッ  
プ的な書物も残っている、そうしたものも紹介したい。さらに、二千枚出たとされる市川團十郎の死絵（人気  
役者などが死亡した時に、プロマイドとして出版された浮世絵）のうち、興味のあるもの、一見、死絵とは思えな  
い浮世絵。八代目團十郎の自害を報じた刷物などについても報告したい。

五は、今までにやってきた馬琴、及び馬琴周辺の事柄の調査、研究の出版。

六は、江戸時代日本最大と言われた名古屋の貸本屋大惣（大野屋惣八）と、名古屋の出版書肆として異色の永楽  
屋東四郎についての研究を進めたい。それに伴って、名古屋関係の出版関係のことも調べ、報告したい。

最後に、これは大妻女子大学特任教授の高木元氏のお手伝いではあるが、『読本年表』を完成させたい。

書き漏らしたこともあるかもしれないが、以上が、大学に在籍中にやり残した研究の大方のところである。私の  
怠慢が大きな原因ではあるが、学務が繁忙を極めたことも、精神的に妨げとなったことは、私の業績表を見て頂け  
れば一目瞭然であろう。特任教授となつてからの研究スピードを見ていただきたい。

以下、近年の大学や研究者の置かれた状況についての私感を記す。

ノーベル賞受賞者たちが仰っているように、文部科学省が推進している大学の研究状況では、研究者は学務に忙しすぎて研究の進歩は望めないのではないだろうか。十年二十年後には、我が国のノーベル賞の受賞者は皆無となってしまう。基礎研究が軽視されていることも重要な点であるが、最近、とみに思うことは、教員（研究者）も学生も余裕がなさ過ぎる、ということである。

昔年、恩師神保五彌先生が、若い英文科の先生と飲んでいて、その先生が、「私は早稲田の教員になりたかった。それになれたので満足だ」と言われたことに対して、「ぶん殴ってやろうかと思った。我々は研究者であって食うために教員をやっているのだ」と仰ったことが忘れられない。インパールの生き残りとして戦争を体験してきた方の言は重い。もちろん、大学の教員のなすべきことは教育と研究である。しかし、我々はまず第一に研究者なのである。

一月十日の朝日歌壇に、

學術は僕しもであるに見做なされてその忠誠が求められ行く

（筑紫野市）二宮 正博

という歌が選ばれていた。悲しくも嘆かわしい日本の現実である。

言うまでもなく、研究者は政治と距離を置くべきである。その立場から日本学術会議は、「戦争に加担するような研究はしない（要旨）」との決議をしている。第二次世界大戦敗戦後、戦争に対する反省のもとに設立されたのが日本学術会議なのである。六人の委員を認可しなかったことに対しての政府答弁は、国語の答案としては零点で

ある。前政権もよく使った手法だが、問われたことに對して真っ當に答えておらず、問題をすり替えている。

「日本學術會議などは、自分と関係ない」と思っている研究者もおられるかもしれないが、各学会の最上部組織が日本學術會議である。もっとも日本近世文学会に入会せずに、江戸文学の専門家として、H大学の総長をしておられる方もいらっしゃるから、必ずしも学会に入会する必要もないのだが。

話が脇道に逸れたが、右のことを認識しておれば、現在の日本學術會議のメンバーの不承認問題に對して、我が同朋学園の三大学の教授会が、何等反応を示していないという無氣力さに對して、猛省を促したい。

現に、東京のS大学の教授会は、政府の日本學術會議のメンバーの不承認問題に對して反対決議をし、文部科学省に申し出ていることを申し添えておく。